沖の石（遺稿）

錦　耕三

海沿ひの新道から山の中に入る路を訊くために、私は逢ふ人毎に道を問うた。逢ふ人も、逢ふ人も、コンナシ、カリサン、晒木綿の手拭ひで姉さんかぶりにした女達ばかり――。男には一人も逢はない。漁場田鳥の畠仕事は、やっぱり女の仕事になっているらしい。老婆や若嫁、娘らが一人、或ひは二三人連れだってやって来る。その誰もがみな申合せたかのやうに、「今日は人が出てゐるから山の中でも道に迷ふことはない」と言ってくれる。今日に限って何故人が出ているのか、はっきり私には訳らないが、山路を行く旅人にとって、全く頼もしい言葉であった。けれども、あまりに簡単すぎていささか心細い気もする。

山路に入ると、道は漸く細く嶮しくなった。枯葉が一杯に道を埋めてゐる。「山の中でも人が出てゐるから……」とは言ってくれたが、人の姿どころか、もの音さへ聞えない。落葉樹は、枝々の芽ばえがもうかなりふくらんで、しとど宿った露の玉が木の間からさしこむ日光にきらめいてゐた。陸測五万分の一の地図をとり出して、かそかに聞える潮騒の音と、山の地形とをたよりに地図を読みながら、私の足はいつか急ぎ足になってゐた。矢代の祭りが何時ごろから初まるのか訳らないだけに、息をはづませつつ、心はひたすら急いでゐた。潮騒の音が急にま近くなったかと、眼の前の谷が展けて山の木の間から眼にしむばかりに青い若狭の海が再びひらけて来た。裏日本にしては珍しい春日和である。海の中にただ一つ見えるもの、地図でみればどうやら「沖の石」らしい。小倉百人一首の名歌

わが袖は　潮干に見えぬ沖の石の　人こそ知らね　かわく間もなし

の沖の石があれだ。と土地では伝へてゐるのである。歌の作者讃岐は二条院の侍女で源頼政の女、勅勘を蒙って田鳥浦に謫せられた。配流の原因は、平清盛の讒言によるものと伝へられており、不遇の身を泣き佗びて、つひにこの土地で亡くなった。姫の住んだ屋敷跡は今も御所平といって里人達はその附近へ女子の入ることを禁じてゐる、といふのである。讃岐姫が死んでの

錦　沖の石

ち、哀れな姫の霊を社に祀ったのが釣姫（ツルベ）明神で、社の所在する部落は明神の名をとった今の釣姫の部落なのである。讃岐姫の物語とともに、父頼政の鵺退治の話までが、田鳥や矢代を中心として内外海村の山々や谷々の木、磯辺の岩石などにしっかり根を下し、村人達の心の中ですく〳〵と成長して、いつしか村の歴史にまで発展してゐた。かつこれが、村人達にとってはおらが村の自慢話の一つにもなってゐるらしく、郷土誌などは、誇らしげな記述の筆をはしらせてゐるのである。

私は山路を歩きながら、二条院讃岐姫の哀話に思ひをめぐらせてゐた。村とは縁のない旅人のほんの気まぐれに思ひ浮べた常識的な判断であるのに、それでも割り切れないことばかりである。

第一は、土地の伝へによると、この附近は頼政の領地で、その住居跡が今の宮川村大谷にあるといふ。讃岐姫が流人生活をした屋敷跡は、釣姫の西北にあたる山の中にあるが、もと〳〵頼政とは縁の深かった土地なのである。さうした土地へ讃岐姫を流したとすれば、凡そぼんくらな処罰であって、清盛はここでも頼朝の蛭ケ島式誤謬を冒してゐたわけになる。

第二は父の屋敷近く――仮にこれが別荘だったとしても――で暮しながら流罪の身の侘びしさをかこったとは、どう考へても、讃岐姫も随分我がままな姫君でおはしたらしいことになる。

第三は歌の内容から想像してみよう。潮干に見えぬ沖の石のは序になってゐる。毎日眺め暮しては涙にかきくれてゐたのだから、単なる想像でなく瞩目発想をしてゐることになる。とすれば、いささかお粗末すぎる描写ではないか。まう少し実感的な、痛切な調子が出てゐてもよさそうで、おせっかいな話ではあるが、有名すぎる歌だけに作者の名誉が気にかかるのである。また沖あひ約一里の沖の石を配流の身の上にひっかけて流されてゐると解釈すると、どうも芝居気がありすぎてかへって悲しさの方がひっこんでしまふ。

第四は、沖の石などといふ名称は、どこの土地へ行っても一つや二つはありそうな名である。吉田東伍氏なども、「附会の談のみ」とあっさり一笑に附して土地の人々の気持ちに少しも同情のない口ぶりである。さらに頼政父娘の物語も、此土地の専売特許ではなく、まだ〳〵他の地方にも伝へられてゐる筈である。『松山雑記』の話では、頼政の母が、我が子に立身させたい為に鵺になって京都を騒がせ、またあらかじめ打合せをしておいて息子頼政の弓に射られたことになってゐるが、こんなところまで矢代の話と一致してゐるのである。

矢代といふ地名についてはこんな話もある。

『矢代はもと稲富浦といって、このあたりは源頼政の領地であった。観音様のお告げがあった翌朝、稲富村の山中で山鳥を捕へて羽をとり、また宮川村の竹藪で矢竹をとって来て矢を作り怪物を退治した。頼政は非常に喜んで直ちに稲富村の観音様へお礼まゐりをして厚く礼をのべ稲富村の一部と外面（ソトモ）の方面を観音様に奉納した。これから稲富村を矢代と呼ぶようになった。今も宮川村に頼政を祀った堂があり、矢代にも頼政の屋敷跡がある。尚矢代では山鳥を食べない。（―福井県伝説集―）』

かうした田舎の人の夢をあざ嗤ふ都会人

の方がかへってものあはれを知らぬ哀れな人間なのかも知れない。やっぱりこのまゝじっと蓋を閉ぢて、村人達の心の平和をかき乱さない方が幸福なのだといふやうな気がしてならない。

第五は、讃岐姫を祀った社を何故釣姫明神といふのであろうか。釣姫はつるべと訓ませて、古文書などには釣部と記してもゐる。讃岐についての記録は、田烏の秦氏の家から出た古文書として珍らしがられてゐる「秦守高注進状田烏立始所子細事」に「さぬきの尼御前のあとなりとて宮川地頭殿可知行由度々沙汰候いしかとて、今以て田烏浦いろはず候き。さぬきの尼御前の御子息も、黒崎山上をはかりもせられず候き」とあって讃岐姫の哀話は随分古くからこの地方に伝承されてゐたらしい。ところで、歌の作者を讃岐姫といふのと、讃岐の尼御前といふのとでは歌のもつ抒情的価値がよほど異って感じられる。姫といふ文字や語感――尤も現代人の感情である――から歌のもつ内容が一層哀れに響いて、いかにも楚々としたうらぶれた姫君の流人生活が連想され、ものゝあはれは一入まさって、近代女性のもつ感傷に近いまでの線の細さと情緒さへ感じられる。それに反して尼御前とすると、調子の優美さがかなり減殺されることは否めない。土地の人々は尼御前といはず、姫と伝へてゐるので、おそらく哀れな姫君の物語を心に描いて来たのであらう。そして村人達は、波間に見えがくれする沖の石を見るにつけ、哀れな姫君の物語を実感的に思ひ浮べて共鳴し、同情の涙を絞ったことが想像される。讃岐姫の物語は存外村人の生活に抒情的要素を植えつけ、潤ほひのある人生を教へてゐたのであった。

かうして考へて来ると、ふと思ひ浮ぶ暗示は、讃岐の尼御前といふのも頼政父娘の物語を語って歩いた旅の巫女が、比丘尼の名前ではなかったかといふことである。二条院に仕へた讃岐といふのも和泉式部と同じ種類の女性を想像することが出来ないだろうか。物語の主人公の名と、物語を語って聞かせた比丘尼の名とがいつの間にか習合してしまふ可能性もある訳である。百人一首の名歌を織込んだ哀れな物語が、京都から波状的に地方の村々に撒布され、村では物語の内容が実在の山や谷や岩石と結びついて、村の歴史にまで育ってゐる間に、発生地の京都では、もうそんな物語はすっかり忘れて了うたことであった。

沖の石はまだ見えてゐる。眼を西の方に転じると、入海を隔てた彼方の岬の磯浜に春の陽ざしが一ト際白く照りかへしてゐた。

「あっ、矢代の家の屋根ではないか」

目的地の矢代に心急ぐ私の眼にふとさう見えたのであるが、じっと見つめると民家ではなく、磯の岩や石が光ってゐるのであった。人里はまだ見えないで、ただかさ〳〵と落葉を踏む私の足音……。潮騒の音……。どこまで行っても歩いても、寂しい磯浜の山路がつづいてゐた。

○註解

この一文は昭和二十年四月三日の小浜市矢代の手杵祭を取材に出かけたときのものであるが、いつものように年月日が入っていない。当時朝日新聞記者として福井支局に在勤し、敗戦前のあわただしい中にあって、記者とし民俗学徒として活躍していた。国鉄小浜線大鳥羽駅で下車し、田烏を経て矢代に至る約二十キロの

山道を、手杵祭のはじまる時刻を気にしながら歩るいていく筆者の姿がしのばれる。手杵祭の記録は本誌九巻一号に「矢代の手杵祭」として掲載されている。この時のものと思はれる紀行文「田鳥禰宜のつとめ」などがある。（小林一男）